

Title	漢魏の屯田と晉の占田・課田
Author(s)	米田, 賢次郎
Citation	東洋史研究 (1963), 21(4): 369-393
Issue Date	1963-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/152625
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東洋史研究

第二十一卷 第四號 昭和三十八年三月 發行

漢魏の屯田と晉の占田・課田

米 田 賢 次 郎

一 序

北魏の均田制の先驅をなす、西晉の占田・課田制において、課田は屯田地の解放されたものであり、占田は全農民に對する土地の所有制限であるという説が、我國における有力な見解である。^①この全國的な限田である占田制が、貴族勢力の強大化しつゝあつた西晉時代に創始されたということに、多少の不安を感じていた。それでこの占田・課田の制もまた從前の制度に強く規制されたものではなからうか、との疑を存していた。その後西嶋氏を始めとする諸先學の力によつて、魏の屯田の歴史的位罫が究明されるに及んで、ますますその感を強くして來たが、最近漢代の屯田にも組織を異にする二つの型があり、遠く西晉の占田・課田の祖型をなすものではあるまいかと考えると共に、占田についても多少の異説をいだくに至つた。これら先學諸氏の成果にもとづいて漢・魏・晉の屯田と、西晉の占田・課田制を、この考えのもとに系譜的に素描しようと試みたものが本論文である。

二 漢の屯田の二つの型

漢代の屯田として周知のものは、趙充國の屯田である。彼は匈奴に代つて漢の西北の邊境をさがす羌族を征討した際に、屯田の利十二ヶ條を説いているが、その前文に次のように言っている。

計度臨羌東至浩亶。羌虜故田及公田。民所未墾可二千頃以上。……願罷騎兵。留弛刑應募。及淮陽汝南步兵與吏士私從者。合凡萬二百八十一人。用穀月二萬七千三百六十三斛。鹽三百八斛。分屯要害處。冰解漕下。繕鄉亭浚溝渠。治湟陁以西道橋七十所。令可至鮮水左右。田事出賦人二十畷。至四月草生。發郡騎及屬國胡騎。伉健各千。倅馬什二就草。爲田者遊兵。以充入金城郡。益積畜省大費（漢書 六九 趙充國傳）

この文より、趙充國の屯田は弛刑や應募を別とすれば、その兵力は淮陽・汝南の兵が主力を占めていた。彼等は曠作地帯の中で最も集約的な農法に慣熟していた人々である。さて彼等は一人當り二〇畝の土地を支給されて屯田したのであるが、この二〇畝という面積は、文中に示されている如く、二千頃の間可墾地を一萬人に割當たとも考えられ、必ずしも一人當りの勞働力を完全に燃焼させることを目標として、決められた面積であつたか否かは、多少うたがわしいが、次の木簡にも示される如く一人當り二〇畝は、以後の屯田の一つの基準となつた如くである。

大麥二頃已截廿畝。下床九十畝。溉七十畝

將張儉部見兵廿一人 小麥卅七畝已□廿九畝

禾一頃八十五畝溉廿畝。蒔五十畝 (シャバンヌ七五二)

將梁襲部見兵廿六人 大麥六十六畝已截五十畝。下床八十畝。溉七十畝

小麥六十三畝溉五十畝

禾一頃七十畝、蒔五十畝。溉五十畝 (シャバンヌ七五三)

この二簡は同一の木簡の表裏をなし、蒲昌海（ロプノール湖）の畔で發掘したものである。^⑤また兩簡の割當てられた屯田面積も、梁襄の場合は、總計三八〇畝、一人當り一五畝に對し、張儉の場合は五一二畝、一人當り二五畝となつてゐるが、兩者とも二〇畝の變則とみて差支あるまい。なお兩簡には割當面積に相違があり、各畝の栽培品目も多種にのぼり、コキザミに栽培されている點から判斷して、兩者とも屯田地が一ヶ所に集中してゐたのではなく、近くの可耕地を適宜耕作してゐたものと推測される。したがつて、張儉、梁襄の部下は、この際本來の任務たる東西交通路の警戒、或は驛傳の任務を果しながら、他方餘剩勞働力を農業に投じて屯田を行なつてゐたものである。それゆゑ、二〇畝の面積は漢代における「且田且守」型の基準的な面積であつたと思われる。

しかし、この趙充國の「且田且守」型の屯田は、屯田の普遍的な形式とは言えまい。この形式の屯田は、戰鬪が頻繁に繰返される場合や、戰場が移動する際は實施不可能であり、戰鬪が優位にたち、長期に敵と對峙する時は、耕作者と兵士とを分離する形式、すなわち居延型の屯田の方が有利である。趙充國の屯田は、本來權宜的な屯田の中でも最も權宜的なものであつて、やがて居延型に移行すべき性質のものである。

居延の屯田は周知の如く、塞を守るべき戍卒と、屯田の耕作を任務とする田卒が分れており、「耕戰分離」型とも稱すべきものである。この居延の屯田に代田法を適用した事は漢書食貨志中の趙過の犁に關する記載に明示されており、明白な事實であるが、居延木簡中比較的前期のものに屬する、所謂「第二亭長郵」に關する一聯の文書は、代田法が居延に施行されてゐた事を實證する貴重な資料である。^⑥しかし居延屯田の實施内容を明らかにする文獻は、一萬點の居延木簡の中にも極めて斷片的にしか、發見する事が出來ないので、木簡を利用した居延屯田の研究は後攻をまつとして、今趙過の犁の内容から屯田の状態を若干推察してみたい。

趙過の犁およびそれを使用した代田法について、私は從來の説には少なからざる疑問をもち、この數年間種々検討を重ねた結果、次のような結論に到達した。紙數の關係上詳細な考證は別稿をもつて近々世に問うこととして、今その結論だ

けを要約しておこう。

(1) 趙過の代田法のシステムは耕犁と下種器とよりなる。漢書食貨志に見える二牛三人の耦犁は耕犁をさし、齊民要術に見える一牛三犁一崔寔が趙過の利に頼るといつているものは下種器であるまいか。

(2) 耕犁は單なる作條型ではなく、土嚢を反轉さす機能を有していた。

(3) (1)(2)と關聯して、代田法は灌漑を前提とする農法で、乾燥地に施行された、反當收穫量の低い農法ではない。

(4) 犁は原則として、五頃に一犁の割合で所有され、恐らく五家共用であつたらう。したがつて一軒の所有面積は百畝
 Ⅱ一頃が標準であつた。

(5) 平都令光の人輓犁とは、別個の犁でなく、彼は自己の管轄下で、牛のない家に五軒組を組織して、かわるがわる耕作せしめ、その方法を趙過に進言したものであらう。

以上のうち、ここに直接關係のあるのは、(4)と(5)である。かりに五家一組となつて、交替で犁を引くと、「人多き所は一日三十畝、人の少ない場合は日に十三畝を耕作することができた」というが、五家一組で、人多い場合を考えるならば、牛の代りに犁を引く人数は、約一〇人、少ない場合で五人位とみて差支あるまい。屯田の田卒をもつて、趙過の犁を使用した場合、充分の人数が配置されたに違いないから、一〇人で犁一つをあつかつたものと見られる。従つて此の場合、一人當り五〇畝の面積が基準であつた。即ち、「耕戰分離」型の屯田の場合は、「且田且守」型の割當面積に比して約倍額であつたと見て大過あるまい。

令玉門屯田吏高年 驗田七頃 給負陁刑十七人

この簡は張鳳の「漢晉西陲木簡彙編(五六葉第七簡)」である(文字は多少訂正した)。玉門屯田吏の高年が陁(陁)刑十七人に七頃をあたえた事を記した簡である。屯田吏という屯田を司る専門の官の名があるから、これは「耕戰分離」型の屯田に違ひなく、一人當り四〇畝となり、大略前述の畝數を裏書する結果を示している。もつとも勞幹氏は、「居延の屯田は計畫

されたが、本格的には實施されなかつた^⑧という見解を述べているが、代田法自體は大島氏の論證にも見られる如く、屯田に最適の方法であり、やはり漢書の記載の如く、居延地帯は、代田法の最も施行された一地域と考えるべきであろう。

以上の考察に大過がないとすれば、居延の屯田は一人當り五〇畝前後で、大略「且田且守」型の倍額にあたり、而も耕作者が、最も集約的な畠作農耕を行なつていた地帯の人であり、専ら耕作に従事していたとするならば、その土地の經營の方法は内地のそれと大差のないものと言ふべきである。

さて國家が土地を支給する場合の今一つの例として公田を假作さす場合がある。漢代では飢饉の際に流亡する者に公田を假作さしたり、或は官が渠を作つて、それにより生れた美田を人民に假與した例は少なくない^⑨。公田の假作には詳細に見れば種々の形態があり、假與された時の耕作者の政府への依存状態により千差萬別であつたろうが、公田も佃作に出されるものと解すれば、當時の小作料の基準である五割の小作料を出すものと假定しておいても見當の失したものであるまい^⑩。

以上より見ると、漢代において國有地を割當てて——國營・民營を含めて——耕作させる形態が三種類、(1)且田且守型の屯田、(2)耕戰分離型屯田、(3)國內無主地の假田である。これらが魏の時代に如何に受繼がれてゆくであろうか、次に検討してみたい。

三 魏 晉 の 屯 田 の 二 つ の 型

魏の曹操が群雄を制壓して、中原に霸をとなえ得た理由の一つに、彼が獻帝を許昌に迎え、建安元年に許都に屯田を興したのを始めとして、各地に屯田を開き、流民を募集して開墾につとめ、所在に穀を積み、もつて軍の行動力を増加せしめた事が指摘されている。この屯田は、周の井田を別とすれば、國家的規模における中國最初の土地制度ともいい得る重要なもので、從來から幾多先學の貴重な研究がある。これらの業績の上に立つて、私の考を展開してみよう。

魏の屯田も西嶋氏が指摘した如く、^⑨大局的に見て二つの形式にわけられる。一は華北一帯の屯田、主として典農官の支配する屯田で、所謂「民屯田」であり、いま一は所謂「軍屯田」で、度支尚書及び都督等の管理下に属するものである。

同時に恐らく前者が畠作であつたに對し、後者は水田農業であつたであらう。

(1) 華北民屯型

まずここで問題としたいのは、屯田地をどのように耕作者に割當たかという事である。この點に關しては、非常に史料が少なく、魏の屯田の研究の中でも、比較的閑却されていた部分であつて、好並氏の勞作が唯一の研究であつたが、最近水津一朗氏の研究も公表されて、^⑩この方面の研究にも次第に曙光を見出しうることになつてきた。

周知の如く鄴は、戰國の時から漳水の水を利用して大規模な灌漑施設が作られており、華北における農業の先進地域の一であり、曹操の根據地でもあつたから、數多の華北屯田の標準的なものと考え得るであらう。この鄴の屯田の記録として從來から水經注に、

號天井堰。二十里中作十二壇。壇相去三百步。令互相灌注。一源分爲十二流。皆懸水門（水經注 一〇濁漳水の條）

とあり、三〇里の間に一二壇を作り、漳水の水を引き灌漑した事を述べている。^⑪この一二の壇は、いづれも直接引水口を漳水につないでいた事は、前文の外、左思の魏都賦にも、

腴腴埆野。奕奕畱畝。甘荼伊蠶。芒種斯阜。西門溉其前。史起灌其後。壇流十二。同源異口。蓄爲屯雲。泄爲行雨。

水澍稷稌。陸蒔優黍（文選卷三）

とある點より見て明らかである。しかしこの文のとおり、二〇里の中に一二の取水口を等間隔に設備したならば、漢制三〇〇步一里として、壇間相去ること五〇〇步、或は唐制三六〇步を一里として六〇〇步となり、壇間相去ること三〇〇步という前述の水經注の記録とは首尾一貫しなくなる。その矛盾を解決するため、好並氏は宋會要稿（食貨七）に引かれた仁宗天聖四年八月の次の項を引く。

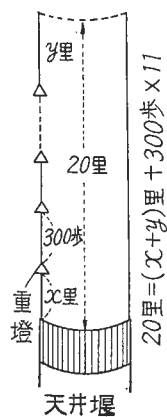
仁宗天聖四年八月。監察御史王沿上疏言。臣徧觀史傳、但載灌漑之饒、不書疏導之法。唯本州圖經。稱有天井堰者。魏武帝所作。二十里分十二重堰。每堰相去三百步。令互相灌注。

この文中の重堰の語に著目し、重堰を「堰を重ね」と読み、一二に分つて堰を重ねる、即ち二四の堰が作られたと解釋している。すると二〇里の間を二四等分するわけであるから、漢制の一里三〇〇歩ならば、堰間二五〇歩となり、新制（唐制）三六〇歩一里ならば、三〇〇歩になるわけである。

好並氏の研究は、今迄の空白を埋めたものとして高く評價さるべきであるが、鄭は前述の如く、西門豹・史起以來、漳水の灌漑によつて肥沃を誇つた地であり、曹操も鄭を占領した後は、末端の細流はともかく、基本的な部分は前代の機構を用いて屯田を施行したのに相違あるまいから、舊い尺度を使用している可能性があつても、新しい尺度を使用した可能性は少い、と見るべきではあるまいか。また、宋會要稿より時代も近く、信憑し得る水經注や魏都賦の記載は、十二堰となつてゐるにかかわらず、八百餘年後の宋會要稿にのみ正しい記録の残つてゐるのも不自然であるまいか。「堰を重ね」と讀んでも二十四の水流があつたとは解釋しがたいように思われる。以上の疑問を解決するために、私は鄭の屯田機構を次の様に理解したい。

天井堰は好並氏の指摘する如く、四方が高くなつて中央が低くなつてゐる形の堰とするならば、これは堰の頂上の形をいつたもので、「四方即ち兩岸に接する所が高くなり、中央の部分が低くなつてゐる」形をした堰隄で、一定の貯水量を上廻れば、中央部から溢水させて、堰隄の保護を計るための配慮をしたものであろう。この天井堰の場合、堰隄一杯に満水すれば二〇里上流までダムと化することになるが、假りに漢尺にして二〇里とすれば八千餘で、天井堰の高さは不明であるが、相當高い堰であつても、八千餘の上流までは漳水の流れが餘程緩慢でなければ、當時の技術として、到底考え得られぬであらう。逆に當時の技術で、二〇里の上流までダム化する事ができたのは、北支の大平原のゆうゆうたる流れであればこそ作り得たと考えた方が理に適つてゐるかも知れない。河川の流れが緩慢であるという事は、同時に遠淺である

圖一



ことを意味するものである。従つて多少減水したならば、上流の方は長く河底が露出されるであらう。この事は上流の方

には取水口を設ける事の無意味さを示すものである。我國の例を見ても取水口は堰に近く設備せられ、用水池の樋は土手に近い深所に作られている。従つて

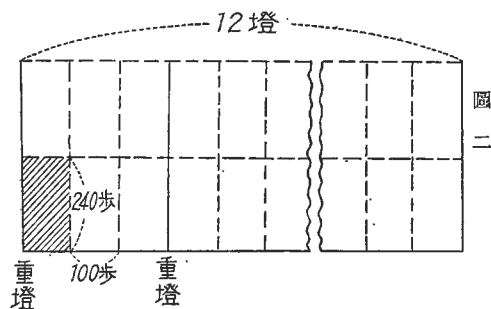
二〇里の上流地帯には堰は設備されず、天井堰の近くから順次三〇〇歩の間隔をおいて堰を設備し、上流數里は堰を設けられなかつたと解すべきであらう(圖一参照)。重墪とは、一つの堰に上下二段の取入口が設けられ、満水の時には、

上の取入口を使用し、減水すれば下の取水口を開いて水を流すようにしたものである。中國のように降雨が夏の僅の間に集中する所では、年間を通じての増水時と渇水期で水位に非常な差があり、このような考慮は當然必要であらう。

以上「二十里中作十二堰」を私の様に解釋すれば、當時の水經注や魏都賦と、更にはるか後世の宋會要稿の記事が一致した事になり、水經注や魏都賦が矢張り信頼できる史料といえるであらう。

堰間三〇〇歩の中は、文中「令互相灌注」とあるから、縦横に灌漑水路がつけられていた筈であり、恐らく水津氏の想像する如く、一〇〇歩づつ三等分せられ、更に直角に二四〇歩ごとに溝が附せられ、一〇〇歩×二四〇歩＝一頃という廣さの田に分割されていたものと思われる。(圖二参照)

周知の如く華北の地帯は最初こそ群雄の割據の地であつたが、比較的早く魏の勢力下に入つた關係上、この屯田を耕作する者は、効果の少ない「且守且田」型を採用する必要はなく、民を募集して屯田の耕作に専念せしめる、民屯型の經營を行なつていた。かつ初期の屯田には黄巾の亂などで投降した兵士が多く、彼等獨身者には、占領地で掠奪した妻女



圖二

を登録して獨身兵士に配している。民を募集し、獨身兵士に妻子を配して屯田に使用したものであれば、これら華北の屯田（典農官屯田）は戸を主體として土地を配分したに相違ない。一枚の田を百畝Ⅱ一頃とすれば、丁度一戸の適正規模と稱すべきであり、牛耕を以つてすれば、五―六割の小作料は、丁度收奪可能の限界と考えられるであろう。

この華北の屯田Ⅱ典農官屯田の廢止に關しては、

是歲（咸熙元年）罷屯田官。以均政役。諸典農皆爲太守。都尉皆爲令長（魏志 四 陳留王紀）

（泰始二年）罷農官 爲郡縣（晉書 三 武帝本紀）

の二文がある。兩者には二ヶ年の差があるため、種々の見解が出されているが、西嶋氏の説の如く、泰始二年に多くの郡が設置されている點から見て、咸熙元年に發布されたこの詔が、魏晉禪讓の事件のため、泰始二年になつて完成したと考へるのが妥當であろう。（文選卷二の張平子の南都賦に「賦政任役。畏人力之盡。」とあり政Ⅱ税と解すべきである）

さて問題はこれによつて屯田民の負擔が加重されたか否かであるが、結論から言えば、名目的には藤家氏の説く如く、役が加重されたものと解すべきであらう。屯田民は其の性格から言つて、軍糧の生産が本來の目的であり、ある意味においては、田作それ自體が、役的性格を持つものであつて、田作を役とみなさないならば、原則的には役が無かつたものと推測できるからである。しかしそれは役に相當する勞働がないという事にはならない。司馬芝の屯田の上奏文に

夫農民之事田。自正月耕種。耘鋤條桑耕種麥種刈築場。十月乃畢。治廩繫橋。運輸租賦。除道理梁。塹塗室屋。以是終歲無日不爲農事也。今諸典農各言。留者爲行者宗田計。課其力。勢不得不爾。不有所廢。則當素有餘力。臣愚以爲。不宜復以商事雜亂。專以農桑爲務。於國計爲便。明帝從之（魏志 一一 司馬芝傳）

とあるが、正月より十月までの仕事は明らかに農業本來の仕事であるが、それにつづく運輸租賦除道理梁は、必ずしも農業の本來の仕事ではなく、寧ろ役にあたる内容のものであり、屯田民にも、單に耕作だけでなく、役に類する仕事も課せられていたことがわかる。思うに彼等屯田民の出自は前述の如く、叛亂民の降服者が妻子を與えられたり、また戰亂地の、

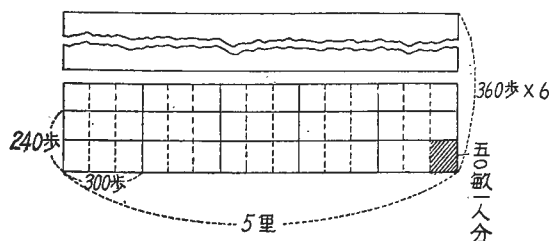
土地なき民が募集され、生産手段を與えられた者で、一般人民よりも人身支配が強く、公民というよりも、むしろ皇室の私的所有の性格を有する部曲^⑤に近い存在でなかつたかと思われる。したがつて屯田を廢止して、一般人民と同じ「役」を課する事は、公民としての認定であり、負擔の輕減であつたと考えてよいであらう。

(2) 淮南型屯田（且田且守型）

鄴の屯田が、民屯型の代表とするならば、今一つの軍屯型を代表するものは、有名な鄧艾の屯田である。^⑥鄧艾の屯田については周知の如く次のような一文がある。

(A) (宣) 帝因欲廣田積穀。爲兼井之計。(B) 乃使鄧艾行陳項以東至壽春地。艾以爲田良水少。不足以盡地利。宜開河渠可以大積軍糧。又通運漕之道。乃著濟河論以喻其指。又以爲昔破黃巾因爲屯田。積穀許都以制四方。今三隅已定事在淮南。每大軍征舉。運兵過半。功費巨億。以爲大役。陳蔡之間土下田良。可省許昌左右諸稻田。并水東下。令淮北二萬人淮南三萬人。分休且佃且守。水豐常收三倍於西。計除衆費。歲完五百萬斛。以爲軍資。六七年間可積三千萬斛於淮北。此則十萬之衆五年食也。以此乘敵無不剋矣。宣帝善之。皆如艾計施行。(C) 遂北臨淮水。自鍾離而南。橫石以西。盡泚水四百餘里。五里置一營。營六十人。且佃且守。(D) 兼修廣淮陽百尺二渠。上引河流。下通淮潁。大治諸陂於潁南潁北。穿渠三百餘里。溉田二萬頃。淮南淮北皆相連接。自壽春到京師。農官兵田雞犬之聲。阡陌相屬。每東南有事。大軍出征。汎舟而下達于江淮。資食有儲。而無水害。艾所建也（晉書 二六 食貨志）

このうち(A)は、宣帝の方針にもとづく鄧艾の屯田創設のための下檢分ともいふべき文であり、(B)の部分はそれによつて建てられた鄧艾の屯田プランであり、(C)は鄧艾プランによる淮南の屯田建設であり、(D)は同プランによる淮北の屯田建設に關する部分である。彼のプランによれば、陳蔡の間は、土地低く水田に適しているため、許昌附近の稻田を廢止し、それによつて生れた餘剰の水を東流させて、淮北・淮南の二ヶ所に大規模な屯田を作り、淮北に二萬人、淮南に三萬人を配置し、常時その八割、四萬人を佃作せしめて（鄧艾傳による^⑦）、年間五百萬石の餘剰米をうみ出し、軍糧にあてて、吳の



三 圖

討伐に便宜ならしめようとするのである。ところで右の文を詳細に見れば、淮南における屯田と淮北におけるそれとの間に若干の組織に差のあることがわかる。まず淮南の屯田から考察しよう。

(イ) 淮南の屯田 淮南の屯田は淮水の南岸にある鍾離の南方にあたる横石を東の起點とし、淮南における對吳戰略の根據地壽春を経て、西の方は、泚水に至るまでの間、東西四〇〇餘里にわたるものである。淮南の屯田は「五里に一營、一營六〇人」という組織になっている。五里とはこの場合、對吳戦線の正面幅をいつたもので、五里四方を意味するものではない。前述の晉書食貨志によると、

咸寧元年十二月詔曰……今以鄴奚官奴婢。著新城。代田兵種稻。奴婢各五十人爲一屯。屯置司馬使。皆如屯田法

と、田兵の代りに官奴婢をもつて田作せしめている記録がある。この屯田はもともと田兵の耕作する軍屯田であるから、軍屯田の組織のもとに行なわれた屯田である。然らば、前の「一營六〇人」はその中五〇人が田作に従事し一〇人が分休していたものと解せよう（丁度八割の稼働率となる）。恐らく吳の軍隊を控えた前戦の屯田地帯の事であるから、分休とは田作を休止するという意味にすぎず、實際は敵陣の警戒にあたっていたものであろう。五里間隔に五〇人ならば、一里一〇人の割合になる。軍隊屯田は軍隊組織をそのまま利用するとして、更に想像を加えるならば、一〇人の中一人を長と考えれば、犁をもつて田作する者は九人になる。一人當りの面積は全く推量するより外に方法がないが、前節漢代の場合「且田且守」は耕戰分離型に比較して、半分以下になっているから、約五〇歩と見て大過あるまい。すると、鄧艾の淮南屯田の地割は大體上圖のようなものであつたらう。淮南屯田の幅は四〇〇餘里であるから一列で八〇餘營、一營六〇人であるから約五〇〇〇人が屯田に従事していた。全部で三萬人であるから縦深は六列あつたことになる。

(ロ) 淮北屯田 次に淮北屯田を考察してみよう。鄧艾はまず、淮河上流の淮陽・百尺の二渠の規模を擴大化して黄河の水を淮水・潁水に流入させて、潁水を挾む南北に灌溉水路三百里を掘鑿して總計二萬頃の溉田を作り、これを二萬の屯田人に割當たわけである。所でこの淮北地域は早くから魏の勢力範圍に入り、當時「且田且守」する必要がないばかりか、許昌の近傍の稻田を廢止して、それに使つていた水を東流させて、淮北の屯田を開いたのであるから、淮北の屯田者の多くは、今迄許昌地域の屯田に従事していたものを移住させたに相違ない。その意味では實は民屯に屬するものである。したがつて淮北二萬人となつていても、實質は二萬戸に違ひあるまい。二萬戸に溉田二萬頃を割當たのであるから、一戸二頃になる。

この淮北・淮南の屯田に關しては、周知の如く傳玄の上奏がある。

其四曰、古以步百爲畝。今以二百四十步爲一畝。所覺(受)過倍。近魏初課田。不務多其頃畝。但務修其功力。故白田收至十餘斛。水田收數十斛。^⑤自頃以來。日增田頃畝之課。而田兵益甚功。不能修理。至畝數斛已還。或不足以償種。

非與曩時異天地横遇災害也。其病正在于務多頃畝而功不修耳(晉書 四七 傳玄傳)

右の文によれば、晉の頃には(この上奏文は晉の泰始四年である)魏初に比較して割當の畝數が多くなつてゐる點を強調している。魏初の屯田は鄴の例によれば、一戸一頃であつて、この鄧艾屯田と同面積であるから、晉の屯田の頃畝が廣くなつたといえないようであるが、同一面積であつても、この淮北の場合は水田であるから、一戸一頃(日本の約四町五段)は如何に牛耕といえども、適正面積を相當超過するものといわねばなるまい。^⑥なお、傳玄の上奏文には「田兵」とあつて淮北の屯田が前述の通り「民屯」であるのと一見矛盾するようであるが、淮北の屯田は、對吳戰鬪の便宜のために建設されたもので、淮南の屯田と一體となつて運営されたものであるから、恐らく軍の支配下に屬してゐたであらう。軍屯であるか民屯であるかということは、屯田の經營内容よりも、その管轄者の問題である。

以上本節において、鄴と鄧艾の屯田を中心として、魏晉の屯田の二つの型について若干の考察を行なつてきた。前者は

民屯型であり華北一帯に配置され、典農官の管掌に屬し大體一頃を基準としたと思われ、泰始二年、蜀の平定を機會に解放されて、州郡の中に解消された。一方軍屯は淮南・淮北を中心として平吳の後民丁に割當てられ、戸調式の中に解消されたのである。この二つの屯田を、漢の二つの屯田——且田且守型と耕戰分離型——と比較すれば、屯田の形式と土地の配分において互いに類似性のある事が認められよう。ただ魏晉の屯田は、漢の屯田に比較して、一見國家的經營が、細部まで浸透せず、（特に華北屯田は）民營的性格が強く、その意味では漢の假田に近いものであるが、それは、屯田の場所が、魏晉の國境地帯とはいえ、中國内地に存在していた事、また屯田目的が、漢代のその如く、純粹に國境兵士の食糧補給のみを目標としたものではなく、國家財政の一端を荷擔していたという性格から由來する必然の結果とみなせば、鄴の屯田と典農官屯田は一應居延屯田の系譜を引き、軍屯は趙充國の系譜を引くものと解し得るであろう。

四 晉の占田と課田

以上魏晉の屯田にも「且田且守」型と「耕戰分離」型の二種あり、それは各々漢代の且田且守型と耕戰分離型（假田型も含まれるが）を繼承したものであることを述べてきたが、この二つの系統の國有地の耕作形態が、晉になつて如何に處置されたであらうか。

西晉の土地制度に關する記載は非常に不完全で、晉書食貨志に見える所謂晉の武帝の戸調式がまとまつたものとして唯一のものであらう。

(A) 又制戸調之式。丁男之戸、歲輸絹三匹絲三斤。女及次丁男爲戸者半輸。其諸邊郡或三分之二。遠者三分之一。夷人輸賁布戸一匹。遠者或一丈

(B) 男子一人。占田七十畝。女子三十畝

(C) 其外丁男課田五十畝。丁女二十畝。次丁男半之。女則不課。男女年十六已上至六十爲正丁。十五已下至十三。六十一

已上至六十五爲次丁。十二已下六十六已上爲老小。不事

(D) (遠夷) 不課田者。輸義米戶三斛。遠者五斗。極遠者輸算錢人二十八文

(E) 其官品第一至于第九。各以貴賤占田。品第一者占五十頃。第二品四十五頃。第三品四十頃。第四品三十五頃。第五品三十頃。第六品二十五頃。第七品二十頃。第八品十五頃。第九品十頃。

この占田・課田については從來より種々の説があるが、前述の如く現在一般に有力視されているのは宮崎氏の、占田は全農民の土地の所有に對する制限であり、課田は屯田を解放して、人民に（主として平吳の戰鬪に従つた兵士であろうが）解放した土地である、という説である。私の見解も、氏の説に基づくものであるが、占田は、泰始二年、所謂典農官支配下の民屯田の廢止にともなつて民間に解放された土地であり、課田とは、平吳の後、この戸調式の頒布にともなつて新たに解放された土地で、不課田とは一般の、從來からの私有地を指すもの、という見解である。

私がこのような推論を持つた第一の理由は、當時司馬氏は魏を篡奪して天子の地位に就いたため、豪族・貴族に對して寛大な態度をとり、豪族の一層の割據をみて、莊園時代の端緒がひらけた時期である、という點にある。この時に全農民に對して限田制を施行する事は甚だ困難な事に違ひない。強大な國家權力を誇つていた前漢ですら、哀帝の時師丹が限田制を進言して、諸王・公主・列侯・關内侯以下吏民の所有地を三〇頃以下に制限しようとしたが、遂に彼等の反對にあつて實現に至らなかつた。すなわち強大な國家權力を持ち、人頭税を課して、個別的人身支配さえ前提としていた漢の盛時においてすら、全國民に對する限田制は不可能であつたのである。ましてや平吳の後、國軍の維持すら不可能であつた晉の武帝の時期に、かかる制限は理解しがたい所である。第二は從來の様に理解するならば、占田と課田とは排中關係に立ち、全國の土地は、占田と課田に分れることになり、不課田者の存在餘地がない。従つて不課田者とは當然占田者と同義でなければならぬ筈である。しかし同一戸調式の中で、占田と不課田が同一のものを指すとは、考え難いから、占田、課田、更に不課田の三者が各々別個のものであるべきである。

然らば一五年前、屯田の解放した地を今何故に占田と呼ぶかと言う理由が問題となり、又後文の「官品占田」との関係も追求されねばならぬであろう。以下この點について考察してみよう。占田の占は、周知の如く、漢代以後、「厠出る」「申告する」という意味があり、「男子一人には、田を占めしむること七十畝、女子には三十畝とす、その外の丁男には田を課すること五十畝」という解釋も成立することになる。しかし、後文に不課田者とある以上一家の中に、課田と占田とを區別して、土地を支給したという見解には同意しがたく、占田と課田とは、別個の農家を對象とした政策であろう。太康元年、吳を平定する一五年前の泰始二年は、丁度蜀を征服して、軍事行動にも一段落のついた時で、これを機會に餘裕の出來た軍隊を解散すると共に、典農官屯田を廢止したのであらうから、この戸調式の場合と全く事情が一致する。むしろ魏の屯田は華北を中心としていた事情から判斷して、泰始二年の屯田廢止は、この時以上の規模をもつたもので、これに勝るとも劣らぬ土地改革であつた筈である。とすれば泰始二年の土地改革にも（勿論この際には屯田地のみでなく、一般無主地も對象となつたのは當然であらうが）、この屯田廢止にともなう政令が發布されたに相違なく、恐らくこの時も、戸調式における課田の規定に類似の政令があつたに違いない。しかし十五年の歲月が経ると共に、當然最初の配分が崩れて土地の兼併の始まつた事も想像に難くない。そのため、一五年後天下を統一して、再び同様の屯田分配を行なつたのを機會に、泰始二年に廢止した課田を併せ整理するため、所有狀況を申告させたものであらう。かく考えれば、泰始二年に解放された典農官の屯田を指して、「占田」と稱しても了承できるのではあるまいか。占田の制限が、男子七〇畝、女子三〇畝とのみで、課田の如き年令による細かな區別がないのは、人口の變化、或は個人の經濟能力の不同により、泰始二年の狀態に復する事が困難であつて、僅かに民屯の戸每一頃原則に従つて、男女合計百畝一頃と規定するのが、限界であつたからであらう。土地の制限・分配をする場合、最初の制度を、そのまま維持するためには、絶えざる政治權力の介入を必要とするが、國家權力の弱い晉朝としては、それは不可能な事であつたに違いあるまい。

「占田」をこの様に解釋するとすれば、同じ戸調式に見られる「官品占田」のよりて來たる理由をも考察する必要があ

る。同じ戸調式の中に使用された「占田」の語が、各々別個の意味を持つ筈がないからである。

戸調式の官品占田に關する一品五〇頃以下、九品一〇頃に至る數字は、なんらかの意味において、官品の土地所有高を制限したものである。その點から言えば、前述の庶民の「占田」も「限田」と理解した方が妥當のようである。しかしそれは早計で、實はこの制限が、彼等の所有額のすべてに對する制限か否かという所に問題がある。もしこれが彼等の土地所有額のすべてを制限したものならば、郷品一品の家が代替りすれば、五品の官から仕官する事になるが、五〇頃の中二五頃を國家に返納しなければならない事となる。また郷品一品であつても、現在在官中でなければ、その家は土地所有を認められない事になる。ところで、武帝の初期の頃には、すでに豪族・貴族が土地を廣く兼併していた事は、

泰始五年正月癸巳。勅戒郡國計吏。諸郡國守相令長。務盡地利。禁遊食商販。其休假者。令與父兄同其勤勞。豪勢不得侵役寡弱。私相置名（晉書 二六 食貨志）

と豪勢の家の私客の禁止や、

魏氏給公卿已下租牛客戶。數各有差。自後小人憚役。多樂爲之。貴勢之門。動有百數。又太原諸部。亦以匈奴胡人爲田客。多者數千。武帝踐位。詔禁募客（晉書 九三 王恂傳）

と、武帝が即位の時に、私客の募集を禁じている點より明らかである。また當時の記録によると、全國に莊園・碾磑を經營した富豪の記載があり、例えば王戎の莊園は全國に散在し、彼は毎日その收益を計算したというが、彼の地位は司徒であつても、到底規定の限田を守つていたと考えられない。また石崇は商業を營み、天子に勝る富を所有していた。彼等の致富は商業にもとづくものであつても、當時の商業は土地經濟の基盤の上にたつたものであるから、彼等の莊園もまた廣大なものであらねばならぬ。到底この限田額の範圍に止まつていたとは考えられない。

ここで、この戸調式の限田額を、他の時代の限田額と比較してみよう。前にふれた前漢師丹の限田策は、

有司條奏。王列侯得名田國中。列侯在長安及公主。名田縣道。關内侯吏民名田皆無得過三十頃（漢書 一一 哀帝紀）

とあつて、王侯以下一律に三〇頃に制限されているが、彼等上級の者は、如淳の注による如く、領地から收得する租税が生活の物的基礎となつており、本来ならば私田を所有しない立場にあつて、戸調式の場合の限田制と若干事情を異にしているが、それにも不拘、吏民に至るまで三〇頃の土地を許されているのは注目すべきであつて、若し、戸調式とくらべて彼等が自分の私田に經濟の基礎をおいているならば、王公以下の官吏は遙かに多くの土地を許容されたであろう。また北齊の河清三年の令によれば、

奴婢受田者、親王止三百人。嗣王止二百人。第二品嗣王已下及庶姓王止一百五十人。正三品已上及王宗止一百人。七品已上限止八十人。八品已下至庶人限止六十人。奴婢限外不給田者。皆不輸。其方百里外及州人一夫。受露田八十畝。婦四十畝。奴婢依良人。限數與在京百官同（隋書 二四 食貨志）

とあつて、上下の差によつて受田の人數が定められている。受田額は前文にある如く、百姓奴婢を問わず、男は八〇畝、女子は四〇畝であるから、平均すれば六〇畝となる。したがつて親王以下の土地所有制限は、最底、親王の一八〇頃、以下八品庶人は三六頃となり、規制の上では、戸調式に比較して、甚だしく寛大である。これ等の例から見ても、この戸調式の官品限田制は、彼等の所有額全體を規制したものとしては、餘りにも嚴酷なものといわねばなるまい。かつて河地氏は、この戸調式に許される部曲の人數、客の數の非常に少い點に著目して、これ等の數字は、部曲・客の所有數の制限ではなく、免税の特典を受ける、それらの人數ではないかという説を提出したのは、蓋し傾聴に値する言であらう。もし部曲・客の人數が所有の全體を指すのでないならば、同じ戸調式の官品占田も、所有額の全體を制限したと考えねばならぬ必然性はない。もつとも「一品五十五頃」以下の數字は、必ずしも免税の恩惠を受ける所有面積と斷定するのは早計で、平吳の時期を基準とした、國有地の占有權を官吏に與えたものとも推測できるが、いずれにせよ、その場合の前提として彼等官人に對して土地の所有を申告させる必要があり、占田とは、それに由來する名稱であらう。すなわち、戸調式の(b)と(d)の「占田」は同じ意味に解して何等支障がない。

以上占田・課田が、泰始二年と太康元年平吳の二回にわたつて解放された屯田であろうと言う新解釋を提出してきたが、最後に占田・課田の租税について多少ふれておきたい。戸調式(A)の部分は課に關する記載であり、「丁男の戸は年に絹三匹と縣三斤。女及次丁男の戸主になつてゐる者はその半分、邊郡は三分の二、遠者は三分の一、夷人は資布戸ごと一匹。或は遠者一丈」となつてゐる。この文は、戸主の相違、地域の遠近のみによつて差を附しており、所有する土地の性格を問題にしてゐない。したがつて、これは占田・課田・不課田者全體に通ずるものと考えられうる。しかし田租については戸調式には何等の記載はなく、ただ晉故事の遺文には、

凡民丁課田。夫五十畝。收租四斛。絹三匹。綿三斤。初學記 二七 實記部絹九

とあつて、畝ごと八升の率で課税されてゐる。この史料によつて占田・課田の田租は晉初より戸毎四斛と解する事も可能であるが、晉故事は周知の如く、すべてが晉初のものと解するには種々の疑問がある。私は寧ろ晉故事の文は、占田・課田もやがて崩壊し、最初の均等的配分から土地兼併が行なわれ、更に國家の統制力の退歩と共に、分益の制が不可能となつたため、最初の割當額「丁男五〇畝」を前提におき、實際の所有面積の如何にかかわらず、戸ごと四斛を租税として徴收することになつたものと想像したい。晉の成立の事情から考えて、國家經濟（或は司馬氏の經濟）の基盤になつてゐた占田・課田の収益を、五割乃至六割より、一舉に一般租税なみに引下げるといふ事は不可能であるといふ宮崎氏の説の通りであらう。^④

五 一般州民の場合について

今迄の諸節において、漢の屯田から晉の占田課田に至る系譜について考察して來た。しかし、これ等は國營・民營をとわず、國家が土地の面倒を見て來た場合の考察である。ここで漢から晉に至る私有地について瞥見しておきたい。

前漢代における一般人の租税の主たるものは、通常一五分の一の田租と、成人男女年一二〇錢の算賦である。後漢の光

武帝が天下統一に際して、民生安定のために三〇分の一の税率に切下げた。

(建武六年) 頃者師旅未解。用度不足。故行十一之稅。今軍士屯田。糧儲差積。其令郡國收見田租三十稅一。如舊制

(後漢書 一 光武帝紀)

この三〇分の一は長く後漢の定制となつたが、後漢靈帝の中平二年二月に「稅天下田。畝十錢」と畝を計つて稅を收める事にあつためられた。この方法が魏にも繼承された事は、

其收田租畝四升。戶出絹二匹綿二斤而已。他不得擅興發。郡國守相。明檢察之。無令彊民有所隱藏。而弱民兼賦也

(魏志 一 武帝紀建安九年九月の條魏書所載)

とある事で明らかである。西嶋氏は、この魏の改革について「田租が收穫物に對する定率から、單位面積に對する定額となり、人頭稅的な貨幣徵收が、戸を單位とする現物徵收に變られたもので、一般に戸調制の起源として重視される改革である。この稅制改革は、國家權力が戸の内部まで浸透していないという點で、漢代に比較して農民に對する國家權力の退歩を示すものであるが」と述べられたのは、この曹操の改革の意義を適確に評價したものである。すなわち、漢においては、國家は、戸毎の耕作面積と、其の收穫の狀況、及び戸内の人口狀態を完全に把握しうる事を前提とした立法であり、魏のそれは、戸内の人口狀態には關係せず、また收穫の良否に關係しないという前提にたてられた租稅徵收法であるが、それでも、一戸の耕作面積を把握する事を前提とする。不課田者が私有地耕作者Ⅱ一般州民であるという私の假定が認められるならば、晉の租稅は戸毎三斛の田租と、絹三匹・絲三斤と、土地の所有額の如何にかかわらず、すべて平等、完全な定額租稅となり、國家が各戸の内部に全くタッチする必要がなくなつて來る。國家の稅收としての立場より、定率と定額はいずれが有利であるかという事は、一概には斷定不可能で、むしろ、一定の租收を確保する場合、定額收租の方が安定性に富む事も事實である。しかし定率收租は、理論上毎年の收租額の多少の變動は避け難いが、檢見の判定において權力の強い者が有利である事は否定出來ない。國家權力の強勢な時は、必要に應じ、正當の理由のものに割當の増加を

圖る事が可能であり、民間（豪族）の勢力の強い時は逆の現象が生ずるであろう。更に後漢時代の農業技術の發達にとまなう二年三毛作の成立や、江淮地區における米作技術の發展とを考えれば、定率收租が定額のそれより遙かに有利である事は否めない。この様な時期に定率から定額への變化は、國家權力の農家への大きな退歩を意味するものである。漢より魏、魏より晉へと、豪族の權力が強化される事は通説であるが、不課田者を私有地耕作者（一般州民）と解すれば、租稅徵收の面でも、その事が裏付できるわけである。

次に課稅額から考えてみよう。魏の收稅率を每畝四升とすれば、大體稅率として百分の一位で（畝ごと四斛とみて）、漢代が三〇分一で善政を誇つたに比較して表面上非常な減稅といわねばならない。中國では古來より「一〇分の一」の田租は聖人も認める所であり、およそ考えられない様な低率である。にもかかわらず、魏が一般州郡民にこの低率をもつてしたのは、魏の屯田はすでに本來の軍糧補給から脱して、魏朝の經濟的基礎を支えていたからであろう。更に極言するならば、戰時中における魏の勢力は、主として屯田に限られ、一般州郡民は、地方の群雄に阻害されて、充分の統治がとどかず、ために低い名目的な稅率をかかげ、始めから一般州民からの田租をあてにしていなかったというのが眞相ではあるまいか（不課田者の租稅を義米と言っているのは注意すべきであろう）。魏の屯田は、典農部のそれは泰始二年に廢止されて課田となり、殘餘は平吳の年をもつて課田となつて、魏の場合と同様に「中分の術」を適用されて、晉朝の經濟を維持する運命を與えられていた。しかるに一方州郡民に對する收稅は、晉に至つて魏の度田制より更に一步後退して、土地の所有額の如何にかかわらず、定額收租となつてしまつた。この事は、魏における屯田への依存度より、晉に至つて、占田・課田への依存度が、より高まつた事を意味するもので、占田・課田は實質的に司馬氏の莊園となつたということも不可能ではないであらう。かく論ずれば、司馬氏は、他の莊園主と同じ經濟的基盤に立ち、天子として他の豪族より一段高い立場に立つて、彼等を支配し、統治したのではなく、他の豪族と同一次元に立つが、ただ最大の豪族にすぎなかつたものであるまいか。

以上各節に述べてきた所をまとめれば、次のような表ができるであらう。

漢		魏		晉	
國	趙充國型	淮南鄧艾型	課田	丁男五〇畝	田租中分の術
	軍屯且守且田一人二〇畝	軍屯且守且田一人五〇畝	田租中分の術	調絹三匹	縣三斤
	居延屯田型	屯田型	占	男子七〇畝女子三〇畝	田租中分の術
	耕戰分離型一人五〇畝	耕戰分離型民屯中分の術	典農支配	華北一帯	田租中分の術
地	假田	田租1/2	田租1/30	算賦	田租畝四升
	田租1/30	調每戶絹三匹	縣三斤	不課田(者)	每戶田租義米三斛
私有地	田租1/30	調每戶絹三匹	縣三斤	不課田(者)	每戶田租義米三斛

晉の武帝は吳を討伐した後、有名な國軍の大整理を斷行した。

詔曰。昔自漢末四海分崩。刺史內親民事。外領兵馬。今天下爲一。當輟戢干戈。刺史分職。皆如漢氏故事。悉去州郡兵。大郡置武吏百人。小郡五十人。(資治通鑑 八一 晉紀 三 武帝太康元年冬十月條)

と、晉の縮軍が非常に徹底的なものであつた事を示している。恐らくそれに先達する、後漢光武帝の縮軍に比して勝るとも劣らぬものであつたろう。しかしこの縮軍は、山濤が州軍廢止の詔の出るや、疾をおして其の不可なる事を論じたに對し、武帝が「天下名言也」と、彼の言を傾聴しながらも、遂に用いる事ができず、縮軍に踏切らざるを得なかつた事情よ

り判断しても、彼の本意に出たものでない事は明らかである。もともと軍閥の家柄である帝は、天下を統治するに武力の掌握の必要性は重々熟知の筈であるにもかかわらず、帝が縮軍せざるを得なかつた事情は、國家統一による官僚組織の擴大化にともなう經費の増大のため、軍費の維持が困難となつた事にあると思われるが、その原因を尋ねれば、晉の經濟的基礎は單に屯田の後である占田・課田にすぎず、一般州郡民に對する支配力が貫徹しなかつた點があげられよう。いわば司馬氏が魏朝篡奪のため、貴族勢力と妥協して、天下を統一した無理が、そのまま天子の地位にありながら、實質は一莊園主に過ぎず、一莊園主でありながら、天子としての地位と生活を保たねばならなかつた矛盾を生み出したものであろう。同時にまた、折角の國家統一が、武帝の死と共に、空中分解しなければならなかつた原因もここにあるのではなからうか。

六 結 語

本論において、晉の占田・課田のよつて來る所以を、漢の屯田に求めてきたのであるが、晉の占田・課田といい、漢の屯田といい、いずれにも國家が土地を支給したものである。これを通して、中國の土地制度においては、「國家が土地の給付を行なつた場合にのみ、限田制が可能である」という主張が可能なのであるまいか。廣大な中國においては、如何に強大な中央集權國家といえども、數千萬の農家に對して、其の土地所有の有効な規制を行なう事は不可能に屬する事である。國家の給付した土地に對して、制限を設ける事がその權力の限界ではなかつたろうか。この見解が容認されるならば、晉の占田・課田の系統を引く、北魏以後の均田の性格を究明する上に一つの手懸をあたえられるであらう。本論はもとより多くの假説を含み、論及した範圍も多岐にわたつたため、きわめて不十分で、古代土地制度に關する一つの試案にすぎないものであるが、先學諸兄の御叱正をいただいて、私の今後の研究の資となれば幸甚である。

註

① 宮崎市定「晉の武帝の戸調式について」『アジア史研究第一』

② 例えば西嶋定生「魏の屯田制——特にその廢止問題をめぐつ

所收。

- て」東洋文化研究所記要第十冊、
藤家禮之助「曹操典農部屯田の消長」東洋學報四五の二、
越智重明「魏晉南朝の屯田」史學雜誌七〇の三、
戰前のものとして 井上晃「曹魏の屯田に就て」史觀一六。
この兩箇については、拙稿「秦漢帝國の軍事制度」學生社
古代史講座五 に言及しているので参照されたい。
④ 森鹿三「居延漢簡の集成」とくに第二享食簿について」
東方學報京都二九參照。
⑤ 「趙過の代田法」と題して、史泉に掲載の豫定。
⑥ 勞幹「居延漢簡考證 戊屯田四」しかし彼が根據とした
右第二長官二處田六十五畝、租二十六斛 三〇三・七
は屯田に對する四割の課税とみるよりは、私田に關する十
分の一税とみなす方が妥當である事は、拙稿前掲論文で述
べた通りである。
⑦ 大島利一「屯田と代田」東洋史研究一四の一・二合刊號。
⑧ 增淵龍夫「先秦時代の山林薮澤と秦の公田」中國古代
の社會と國家」所收。
⑨ なお、漢の假田の種々相については、五井直弘「漢代の公
田における假作について」歷史學研究二二〇に詳しい。
⑩ 西嶋定生前掲論文。
⑪ 好並隆司「曹操屯田に於ける方格地割制」歷史學研究二
二四。
⑫ 水津一朗「古代華北の方格地割制」地理學評論三六の一。
⑬ 水經注は刊本によって、文字が異なっている。これについ
ては好並氏の論文には詳細な考證がある。
- ⑭ 好並隆司 前掲論文。
⑮ 一〇〇歩一畝から二四〇歩一畝に、畝の内容が擴大したの
は、無論牛耕の普及を背景とした一人當り耕作面積の擴大
によるものであるが、逆に言つて、耕作面積の擴大化と共に
一頃的面積が擴大しているという事は、一頃は常に一家
の適正面積であるという固定した觀念の存在を意味するも
のであらう。
⑯ 牛耕によれば平均畝ごと四石と思われるから一頃ならば、
四〇〇石となる。六割を收めると残り一六〇石である。大
人一人月三石（例居延漢簡）一家五人として、平均をとつ
て月一〇石とすれば、一二〇石で、まず最低生活の維持が
可能という所であらう。
⑰ 西嶋定生前掲論文。この泰始二年の屯田廢止に關する種々
の説については、氏の論文に詳細に批判せられてゐる。
⑱ 藤家禮之助 前掲論文。
⑲ 好並隆司 前掲論文。
⑳ 唐長孺（魏晉南北朝史論叢所收 西晉田制試釈）や西嶋前
掲論文は晉書九三王恂傳（一六頁參照）に見える、租牛客
戸を屯田戸と見ている。すでに屯田民が軍隊の糧食生産と
いう本務を失なつて、魏室の私的財産となつた事を意味す
るものであらう。その他、屯田民が私有化された事は、母
丘儉が司馬氏の罪十一條をあげた時に「募取屯田。加其復
賞（魏志二八母丘儉傳引儉（文）欽上表文）」や（何）晏等
專政。共分割洛陽野王典農部桑田數百頃。及墟湯沐地。以
爲產業（魏志九曹爽傳）」などの例がある。

②① 屯田民が、一般に百姓・客典農部民等と呼稱されている事からも、彼等の身分の低かった事が推定される（西嶋前掲論文）。

②② 淮南の屯田は鄧艾以前より施されていたが、これに關しては、一應言及の對象としない。

②③ 魏志二八 鄧艾傳には

令淮北屯二萬人淮南三萬人。十二分休。常有四萬人。且

田且守……………

と「常有四萬人」の一句が入っている。

②④ 從來「二萬頃」は淮北と淮南の屯田面積を合計したものであり、この二萬頃を四萬人で耕作するのであるから、一人五〇畝の面積を耕作したという理解が有力である。後述の如く、一人五〇畝の耕作面積を割當られたという結論には賛成であるが。この文章の構成から見ても、淮南の屯田の話は「且田且守」で切れ、以後淮北の屯田の話になっているから、漑田二萬頃は淮北屯田のみの面積と考える。

②⑤ 淮北屯田も淮南の屯田と同様「十二分休」したとすれば、一萬六千人で、二萬頃の田を耕作したから、一人當り二二〇餘畝となり、水田の適正面積を超過し、傳玄の「頃畝の多きを務める云々」の語があてはまる。但しこの地方は、早くから魏の勢力範圍で分休する必要のない地帯と思われるが、或は分休者は、淮南に食糧を運ぶための遭運に従事していたかも知れない。

②⑥ 從來から「水田數十斛」・「畠十餘斛」の收穫は餘りにも高く、疑問とされている數字である。後文に「至畝數斛

已。還或不足以償種」とあるから、若しこの畝が小畝であるならば、妥當な數字となる。但し當時小畝があったという明證はないので、不可解な數字として残しておくより外はない。

②⑦ 天野元之助氏は、水田と畑作の勞働力の比較について次のように述べている。

「なほ大唐六典」卷七、尙書工部、屯田郎中員外郎の條「諸屯田役力各有程數」の條の別註に、「凡營稻一頃、將軍功九百四十八日。禾二百三十八日云々」と見え（中略）一頃即一百畝（五町二反三畝）の稻作に要する人力單位を九四八日（反當一六・一日）とし、粟作のそれを二八三日（反當五・四日）として、水田の代表作物と畑地のそれとの間に、三倍有餘の勞働投下量の相違を、唐の開元年間（七一三—七四一）、屯田地において物語っている」（中國農業史研究二一〇頁）唐と當時の稻作では、田植の作業の有無など、勞働投下量に相當の相違があるが、それにしても、水田の勞働投下量が畑地のそれに比較して倍以上である事は間違あるまい。收穫の面においても傳玄の上奏文でわかる如く水田の方が生産性が高いから、適正面積の點から言えば、水田の方が遙かに少ないとい得る。

②⑧ 周知の如く、「遠夷」の二字は、晉書食貨志にあり、通典にはない文字であるが、宮崎氏の說に従って衍字とみなしておく（宮崎前掲論文）。

②⑨ 從來の種々の說については

鈴木俊「占田、課田と均田制」中央大學七十周年記念論文

集。

天野元之助「西晉の占田・課田制についての試論」人文研究八の九に詳しく紹介されている。

③⑩ 「占」の用法については、平中孝次「漢代のいはゆる「名田」・「占田」に就て」和田博士還暦記念論文集参照。

「其外」語は色々と解釈されているが、私は「其の外の」ではなく、土地給付という大前提に立つての議論の中、議題が小轉換する際の助字であると考えている。丁男を戸主以外の（一六―六〇までの）男子と考えれば、必然的に一家の中に戸主・丁男・不課口者ができ、不課口者だけ「遠者」・「極遠者」と區別されるのが適當ではないように思われる。

③⑪ 晉の律令は咸熙元年七月から撰定に着手し泰始四年正月から頒行されたものであるが、その中に九戸調令、一〇佃令

となっている（鈴木前掲論文）。この戸調令、佃令には屯田地解放の際の詳細な規定が當然含まれていたに違いあるまい。

③⑫ 河地重造「晉の限客法にかんする若干の考察」經濟學雜誌三五の一・二。

③⑬ 吉田虎雄「魏晉南北朝租税の研究」、天野前掲論文、西村元佑「勸農政策と占田課田」史林四一の二はこの説を採っている。

③⑭ 宮崎市定 前掲論文。

③⑮ 西嶋定生 前掲論文。

③⑯ 拙稿「齊民要術と二年三毛作」東洋史研究十七の四、同「應劭「火耕水耨」注より見たる後漢江淮の水稻作技術について」史林三四の二。

③⑰ 草野靖「占田課田制について」史淵 七六。